

独立混成隊第四十四旅団、重砲兵第七聯隊（中成砲隊重砲兵聯隊を改称す）を基幹とする兵力を充當し其の主力を島尻地区に、一部を伊江島及本部半島地区に展開の予定なりしも混成隊の殆ど全部は六月下旬古仁屋沖に海没し、7月中旬に至る沖繩本島地区には重砲兵第七聯隊、飛行場設定関係部隊等とするのみなり。

先島群島地区

独立混成隊第四十五旅団、重砲兵第八聯隊（船湾要塞重砲兵聯隊を改称す）を基幹とする兵力を充當し其の主力を宮古島に一部を石垣及西表の兩島に夫々展開する予定なりしも独立混成隊第四十五旅団も亦独立混成隊第四十四旅団と共に海没し、7月中旬に至るも先島群島地区に於ける地上戦闘兵力は皆無に近き状態に在り。

(3) 其の他の作戦準備

航空資材の揚陸並に將來大兵団の上陸する場合を顧慮し、徳之伊江島、沖繩本島、宮古島及石垣島の諸港湾並に一部交通路の新設修を実施せり

三 第一期作戦準備向に於ける一般の状況並に敵情判断

1. 隷屬系統の変更

オ三十二軍は当初大本營の直屬であつたが、昭和十九年五月十西部軍司令部（防衛總司令部下）の隷下に入らしめられた。南西諸島は従來西部軍の防衛擔任地域なると作戦資材の輸送、給等の見地よりオ三十二軍を西部軍隷下に入らしむるを適當と認められた結果である

2. 敵情

南西諸島近海に於ける敵潜水艦に因る我が船舶の被害は甚大なりしも未だ敵機の来襲を受けず、オ三十二軍に属する限り一般状況は平靜にして僅かに久米島、南大東島及沖大東島が敵潜水艦の威嚇砲撃を受けたるに過ぎない。

敵情判断

軍は次の如く敵の進攻を判断した。然して其の公算大なるは(イ)の場合其の時機は消滅末（二十年春期以降）に在ると考慮しありしも(イ)の算又は純無とは断じ難く此の際に於ては其の進攻時機は今年夏秋候なるべく候るときは殆ど無防備に近い南西諸島は一挙にして易々して敵手に入るの危険あるに鑑み急速に兵力を増強し万一に備えんとを希望せしむマリアナ線の増強を要し、且つ之を保持を確信しなむべき時の状況に於ては問題とならなかつた。

マリアナ線と同時に一挙に南西諸島を攻撃するマリアナ線奪取後十分準備を備へたる後所謂二様攻撃式に南西諸島を攻撃する

依然高統戰法を採用しニューギニア、比島、台湾、暹羅、或は其の一部を奪取し南西諸島を攻撃す

上何れの場合に於ても敵は大東島の如き小島に足場を成むることなく南西諸島中大規模地たるべき沖繩本島或は宮古島は宮古島に直接攻撃するものと判断した。

の二 オ二期（後号）作戦準備

不慮と信せられたマリアナ線が六月下旬以降崩壊し始むるや大本營は急遽南西諸島、台湾、比島等の増強を開始し既中殆ど無防備状態に在りし南西諸島の強化に邁進す。

斯くて七月中旬独立混成隊第十五聯隊を内地より沖繩に空輸せしを始めとし戦艦大和、武蔵以下の海軍艦艇をも動員し、オ九、オ二十四、オ六十二師団を沖繩本島に、オ二十八師団（歩兵オ三十六聯隊）独立混成隊第四十五、オ五十九、オ六十師団を宮古、石垣兩島に独立混成隊第四十四旅団を徳之島に、歩兵オ三十六聯隊を大東島に夫々輸送展開す。

是時兵団の大部は七八月の間に其の一部は九月末頃迄に陸軍航空部隊の掩護下に夫々無事大本營の計画通り各島嶼に展開了る。

1. 沖縄本島

展開兵力の概要次の如く其の兵団部署は後述する

第九師団

第二十四師団

第六十二師団

独立混成隊四十四旅団

独立機関銃四大隊

独立高射砲三大隊と二中队

戦車隊二十七聯隊(一中隊欠)

軍歩兵隊

第五砲兵司令部

野戦重砲隊一聯隊(一大隊欠)

同 隊二十三聯隊

独立重砲兵隊百大隊

中迫撃隊四 隊五大隊

軽迫撃八中队

独立工兵隊六十六大隊

軍防空隊

第二十一野戦高射砲隊司令部

独立高射砲隊二十七大隊

野戦高射砲隊七十九乃至八十一大隊

独立機関砲隊百三乃至百五大隊

重砲兵隊七聯隊

軍船舶団

第十一船舶団司令部

第五海上挺進基地隊本部

船舶工兵隊二十三、第二十六聯隊(各一中隊欠)

海上挺進隊一乃至三、第二十六乃至二十九戦隊

海上挺進基地隊一乃至三、第二十六乃至二十九大隊  
第三、第四遊撃隊

電信隊三十六聯隊

第四十九基地地区隊本部

第二野戦機隊

第三十二軍防衛築城隊

要塞建設勤務二中队

建設警備二中队

四 工兵三大隊

野戦作井二中队

独立自動車二中队

第三十二軍兵隊勤務隊

第三十二野戦兵器隊

第三十二野戦資物隊

陸上勤務二中队

水上勤務二中队

第二十七野戦防護給水部

沖縄陸軍病院

第一船舶輸送司令部沖縄支部

其の他省略

右の外、第十九航空地区司令部指揮下の雅行場南領部隊は雅行場大隊四回中队一隊あり。

捷号作戦指導計画

捷号作戦指導計画はマリアナ線失陥後の状態に對処し大本營に於て  
二月下旬之が準備を發令せるもので、本州北部より比島に亘る地域に  
對敵の東攻方面を概定して作戦準備を整へ、敵の東攻に方つては陸  
空の戦力を結集し、自主的に決戦方面を決定して之を善戦せんとす  
計画にして敵が南西諸島方面に東攻する場合捷二作戦と呼称する。  
捷二作戦指導要領は南西諸島増加団の東進に伴ひ逐次其の輪廓を  
定めた計画の主体は航空作戦にして之を導引すれば次の如し

1. 陸海空の主力(在本土 支那 台湾 比島方面の航空戦力を結

集積する機数は千五百機内外にして敵機動部隊の推定保有数に匹敵すを以て敵をその上陸前に撃滅す。

- 2. 聯合部隊は其の全力を以て作戦に参加する。  
南方基地より我が南西諸島の次戦場に進出するまでには我々作戦発令より約一週間を要する。
- 3. オ三十二軍は所在島嶼守備隊を以て我が航空及新合艦隊の攻撃と相俟つて上陸し来る敵進攻部隊を撃滅する。  
地上兵力次第予備とし上海にオ一師団 台湾に旅団一を配置する

C. 大本營の捷二号作戦指導計画に基きオ三十二軍主力の沖縄島に於ける作戦計画の概要次の通り。

方針

有力なる一部を以て伊江島及本部半島の確保に勉むると共に軍力を以て沖縄本島南半部を占領し、同方面に上陸する敵に対し陸路に兵力を機動集中し、我々航空及海軍と協同して敵をその上陸岸地帯に於て撃滅する

指導要領  
兵団部署  
要図オ一其の一乃至其の四の如し

本計画の主眼とする所は次の通り

- 1. 敵が沖縄本島に上陸する場合は五六ヶ師団乃至十ヶ師団を使用するなり
- 2. 右兵力は我が航空及海軍の攻撃に依り上陸前相当大なる損害を受くべく彼我地上戦力比は必ずしも不利とならざる公算あり
- 3. 敵が海岸地帯狭小なる地域に上陸し其の海空軍の確實なる覆下に爾後の攻撃の彈発力を着覆せんとする若干日(従来例に依る)の同こそ我々の要すべき好機なり
- 4. 我が有力なる砲兵(結集し得る砲兵力は十五噸級以上各合計約百門、輕砲百數門なり)を以て橋頭堡に蟄集する敵

軍資料に鉄壁的打撃を加へ得べし。

各兵團及主力砲兵の集中機動は相当困難なるべきも夜間の利用大運搬の整備並に猛訓練に依り又機動後の戦斗は該方面に事前に準備せる洞窟障地並に集積軍需品に依り共に実行可能の成算あり夜間機動の可能性を信じたる所以は敵の上陸が渡洋作戦的性質を帯び之に協力する敵空軍は全部艦載機なるが故に夜間の発着極困難なると敵の艦砲射撃も夜間は正確ならざるべしとの判断に基くものなり

敵は日本軍式排引きの如くより科学的正確を期する戦法に出づるを期とす、従つて一瞬に多方向に真面目なる上陸を求むべきべく我々の敵上陸点に対する兵力の徹底的集中攻撃可能の算大なり

軍の作戦準備上の重要問題

第一期作戦準備中は、航空の優先重点主義を厳守せるもオ二期に於て地上兵力の大規模増強に伴ひ此の問題は上下左右の間に絶えず機動の対象となり、迂余曲折の後徳之島オ二伊江島西、沖縄南、同官古東の名飛行場は設定一時中止となれるとその反復訓練下の兵団は意を要する地上戦備を拂し約一ヶ月間(九月)に亘り所在島の飛行場建設に殆ど全力を傾注することを余儀なくせしめられり。

オ二期作戦準備中に於ける一般の状況及敵情判断

大本營はマリアナ線失陥後オ三十二軍の戦備強化に大いに努力せしむ敵がベリリュウ、モロタイに進攻して其の主要戦線が比島に指向せられあること漸次明瞭となるに伴ひ戦備の重点は専ら比島方面に指向せられたり。

敵機動部隊は十月十日其の主力を挙げて我が南西諸島に突撃す此の攻撃は台湾沖航空機及比島作戦と一連の関連性を有するものにして其の攻撃重点は 沖縄本島に指向せられ未撃定機數一千

余攻撃目標は飛行場、港池、船舶等にして最後の沖縄の首都は焼夷攻撃を受け数時間にして殆ど全焼せり。

損害は船舶に於て甚大なりし外死傷軍肉弾約二百名市民救済軍需品中糧食は軍の約一ヶ月分、小銃機銃彈合計約七十万発、陸砲彈約一万発等の被害あり。

敵の未發目的は比島上陸作戦を容易ならしむるにあり、作戦に見て軍の物資的損害は輕微にして寧ろ我に取りては空襲する得難き訓練ともなり、又空襲何ものその自信力を養成する至大なる効果ありたり。

3. 軍の地上作戦準備は航空作戦準備に約一ヶ月に及び資重なる日と努力とを費したが時日の経過と共に著々進捗した。

即ち洞窟築城陣地は日に鞏固を加へ軍及各兵団の企図する作戦方針に基く大規模且徹底せる諸演習は統々実施せられて其の効揚りオ二期作戦準備末期に於ては全軍將兵は漸く必勝の信念を固くに至つた。

4. 七月十五日オ三十二軍は台湾軍(九月以降に於てはオ十方面戦斗序列)に入らしめられ、又左の如く軍首脳部の更迭を実施せられたり。

軍參謀長 (旧) 北川 繁 少尉	(新) 長 島 少尉
	(昭和十九年七月十日)
軍司令官 (旧) 渡辺正夫中將	(新) 井島 滿 中將
	(昭和十九年八月十日)

5. 南西諸島に対する敵攻勢の判断は作戦準備オ一期に於ける判断八項の真愈々濃厚となり特に敵がペリリュー、モロタイの攻の後、於て然り従つてオ三十二軍司令部としては敵の南西遠攻の時機は昭和二十年春季以降と予期せり。

其の三、オ三期(天号)作戦準備

A. 十月下旬敵が中部比島レイテに進攻するや大本營は捷一号作戦を命令し該方面に決戦をせむるに決し、他方面に於ける作戦準備

は其の性格を異にするに至つた。

兵力の抽出

十一月一日大本營に對し「オ三十三軍より一兵団を抽出し、比島方面に転用することに関し、協議發し度きにつき十一月三日高級參謀は台北に參集せられたし」との電報があつた。

右電報に應じて軍高級八原大佐の携行した軍司令官の意見書の概要次の如きものであつた。

(1) オ三十二軍より一兵団を抽出せらるる場合に於ては沖縄本島と宮古島とを隔はす其の抽出せられたる島嶼の防衛に關しては軍司令官は責任を負ふ能はず。

(2) 若し必ず一兵団を抽出せらるるとせば、宮古島に在るオ二十八師団を可とす。

(3) 若し軍より一兵団を抽出檢更に内地若し朝鮮方面より他の兵団を補填せらるる考ならば後者を比島方面に転用し前者は其の儘とするを可とする。

(4) 大本營が國運を賭し比島方面に於て決戦するに決したる以上今や南西諸島の価値は大ならず、寧ろ軍司令官以下軍の主力を以て比島作戦に參加せんことを希望す。

台北會議後直ちに大本營は軍より中近衛オ四、オ五大隊(十五糧食砲合計二十四門)を抽出して比島に送り軍が必勝の根基とした軍砲兵隊を以てする橋頭堡強滅射撃の威力に大なる影響を及ぼした。

右兵力の抽出に引続き遂に大本營は沖縄本島よりオ九、オ二十四師団の中何れかの師団を抽出するに決し、其の選定は軍に委任した軍司令官は十一月十七日大本營命令に基き先鋒ある丁次百有する最精銳兵団を軍の決戦場に携けんとし、オ九師団を転用するに決した。

新作戦計画の策定

軍司令官はオ九師団の転用に伴ひ十一月二十五日左の如く沖縄本島に於ける新作戦計画を決定した。

本計画は大本營若し方面軍より新構態に應ずるオ三十二軍に對す

る新作戰企図若し新任務を示さるることなく軍の基本的任務、保有する兵力並に國軍全般の作戰上の要求を勘案し軍が自主的善を盡す意圖を以て策定せるものである。

沖縄本島に於ける新作戰計画

方針

軍は一部を以て極力長く伊江島を保持すると共に主力を以て沖縄南部島尻地区を占領し島尻地区主防禦地帯沿岸に於ては敵の進軍を破挫し北方主陣地帯陸正面に於ては戰略持久を策す敵が北中飛行場方面に上陸する場合は主力を以て四方面に出撃することあり

指導要領  
兵團部署 要図オニ図の如し

新作戰計画の企図するところは次の通りであつた。

1. 捷号作戰に於ては徹底的な攻撃主義なりしも新作戰計画には戰略持久の思想を基本方針とし 若し敵が軍主力の防禦地帯に上陸する場合は之を海岸地帯に集滅するの企圖と希望を有し、
2. 兵力を占領地域に適合せしむる爲中頭地域を放棄し 軍主力を島尻地区に集結せり
3. 混成旅団主力を島袋附近の要所に配置し城外支隊的任務を遂行せしむるは軍の真意圖と言うよりも寧ろ中央部に対する考慮よりなるものである
4. 北中飛行場の敵の使用切當は主として主陣地帯内に在る飛行場程に依る
5. 主陣地帯内海岸地帯に於ける敵集滅の理論的根拠は捷号作戰の場合と同一であり、寧ろ新作戰計画に於ては防禦地域狭少と爲り、砲兵火力及部隊の機動運用着しく簡單容易となりしを以て攻勢の算確實化せりと思考した

D. 新作戰計画策定に際して研究した主要なる諸案の通りである  
第一案

混成旅団は依然伊江島及本部半島にオニ十四師團も亦概必旧配置に在らしめ國軍の軍主力は沖縄島南半部を撤して國頭山嶽地帯に集結し戰略持久を策す

二案

實際に採用せし案

三案

オニ案と概ね同一思想なるも軍主力を以て中頭郡地区を占領する案

四案

捷号作戰の場合と同一構想を以て中頭郡内敵の上陸点に軍主力を機動集中し決戦を求めんとする案

二案を採用するに至りしはオニ五項に記載せる根據に基くの外オニ案軍自体の持久は容易なるも其の持久は戰略的価値に乏しくオニ三案は要飛行場を直接確保し得るの利あるも地形落弱にして戰術上不利、四案は軍の兵力激減の結果攻勢成功の算計しとの判断に據るものである又オニ オニ 四案は現態等より新態等に転移する上に於て既成の利用、集積軍需品の輸送等に於て著しく不利である

各兵團は新作戰計画に基き十一月末より十二月上旬に亘り新作戰地帯に転移し、新たな築城訓練に着手した。

然し各兵團部隊が真剣に築城訓練を開始したのは、昭和二十年一月のことで其の遲延の主な理由次の通りである。

精銳なるオニ九師團其他兵力の抽出難用に関する志氣の充満  
過去數ヶ月に亘る訓練築城に対する必死の努力が水泡に帰した事實  
築城材料(坑木の所要量は莫大にして一兵團の爲に數万本を必要とす)軍需品等の新作戰地帯への輸送難  
新居住設備(軍に於ては軍紀風紀の維持上住民との混住を厳禁した)の爲の努力

新作戰計画一部の變更

混成旅団を島袋附近に配置せる軍の真意は前述の通りなるも軍陣地

(44)

帯を真に注視し其の正面と兵力の關係を検討するに未だ正面  
安心を許さない少くとも歩兵一大隊の占領正面を二軒程度に  
る必要がある。軍は斷乎たる決心を以て一月中旬混成旅団を  
帯内に搬運せしむると共に北、中飛行場方面に対する 軍主力の  
企圖を完全に放棄した。

混成旅団搬運後における軍主力の兵力部署の概要図ナニ

G. 北、中飛行場地区確保に関する論争並に兵力強化問題

軍が新作戰計里に基き北、中飛行場を主陣地帯外に置き敵地  
在りしオ二十四師団を島尻方面に移動せしむるや陸海各方面へ  
主力出撃の企圖をも放棄するに及び其の空氣愈々悪化し中央部  
論関係航空部隊も北、中飛行場地区再強化の要求熾烈なり。

軍主司令部は他の何人よりも北、中飛行場の戦略戦術上の価値  
く認識しあり此の二大飛行場は一度敵の眞面目なる攻襲を蒙る  
至れば南西諸島中絶の飛行場と同様先づ敵空軍に制圧せられ次  
艦砲の有効射程下に曝さることとなるので我が空軍の馬の使用  
は殆ど皆無に近いことが明瞭であつて問題は總めて永く敵空軍  
を利用せしめざるにある。

混成一旅団程度の兵力を拡大且つ地形茲弱なる該地区に配置  
も従來の戦例に明なる如く其の持久日数は西三日を出でざるべ  
惜其の代償として再線有戦力の数分一を一挙にして消耗せざるべ  
らす斯かる程度の持久ならば軍は主陣地帯内の長射程砲に依り  
目的を達し得ると思つた。

眞に北、中飛行場の使用妨害の实效を期せんとせば、徹底的  
の兵力を増強せざるべからず茲に於て軍は聯合艦隊及関係現地  
航空部隊と相提携し大本營に対し兵力増加に關する意見を具申  
之に対し昭和二十年一月二十三日在艦路カ八十五師団を沖繩に  
すべき大本營命令あり、一同放棄せしむ同日夕取消電報來着し  
争オ三十二軍には兵力を増加せざるも軍需品は能ふ限り追送す  
中央の方針明瞭となれり。

(45)

依つて軍は依然北、中飛行場地区に対する処置は変更せず敵多の輕  
を懸ねる後オ十方面軍(大本營)との間に左の如き了解を以て戦斗  
開始するに至れり。

オ十方面軍は台湾教導連隊を沖繩に急派し、第三十二軍は之を以  
て北、中飛行場を直接防禦す

オ三十二軍は主陣地帯内よりする長射程砲に依り能力長期且有効に  
北、中飛行場を制圧す。

特設オ一騎隊(西飛行場地区に展開しあるオ十九航空地区司令部  
飛行場大隊、特設警備工兵隊等)を以て編成し總員約三千名

及オ六十二師団の前進部隊たる独立歩兵オ十二大隊は飛行場地区  
に於て眞面目なる持久戦斗を実行す

挺身新込部隊を陸海両方面より常統的出撃せしめ西飛行場を攪乱  
す

兵力の自力増強

オ三十二軍には兵力を増強せよとの大本營の方針を承知し且刻々情  
の緊迫しつつあるを感知せる軍は一日と雖も馬すところなく安否た  
を得ず凡ゆる手段を盡して戦力の自力増強に努力せり

オ三期作戰準備間に軍の実行した兵力増強の諸施設の概要左の如し  
独立大隊七ヶ大隊の編成

海上挺進基地大隊は總員約九百名を有し三動着中隊と一發着中隊  
より成り兵員の平均年令は大隊に依り差異あるも三十二、三十乃至  
三十五、六十にして既教育兵頗る多く全員小銃を携行す

大隊の任務は海上挺進戦隊の攻襲資材(主として攻襲用の発動艇  
及爆薬)の掩護 砲區 泛水等の工事及警備並に戦隊の宿營給養等  
を擔任するに在り昭和二十年の初頭に於ては既に以上諸工事は掩護  
しありて斯かる有力なる部隊を単に出撃時の泛水の爲に存置するは  
軍全般の作戰上の要求より見て夫當なり依つて各大隊の整備中隊は  
各戦隊に配屬存置し爾余は独立オ一乃至オ三六大隊同オ二十六乃至オ  
二十九大隊と改稱し純然たる戰鬥任務に關せしむるに決せり。

各独立大隊は従来の装備の外軽機、重機各十挺、重機銃、重機銃を備せられ平均総員約六百七々大隊合計約四千にしてオ二十四大十二師團長及独立混成オ田十師團長の指揮下に令属し戦闘の精利を期せり

2. 特設諸部隊の編成

後方諸部隊と離戦開始後は島嶼守備隊の特性に鑑み其の主力を以て純戦闘に参加せしむるを有利とす依つて軍は後方諸部隊の編成に便なる如く改編し之に相当数の自動火器、重機、小銃、造爆雷等を増加整備し左の如く特設部隊を改編せり

特設オ一聯隊

オ十九航空地区司令部以下北、中飛行場地区に在りし飛行場警備隊二、特設警備工兵隊二、要塞建設勤務中隊一等を基幹として編成す。

総員約三千

特設オ一旅団

長 オ四十九兵站地区隊長

特設オ二聯隊

兵站諸部隊より成り総員約三千

特設オ三聯隊

野戦兵器廠を基幹とし総員約二千

特設オ四聯隊

野戦資物廠を基幹とし総員約一千五百

特設オ二旅団

長 オ十一一般師團長

特設オ五聯隊

各海上挺建設出立後の残留人員を以て編成する予定にして約三千五百人員の過半数は防衛召集者

特設オ六聯隊

オ七船舶輸送司令部沖總支部、海上輸送大隊、滞留機関船より成り総員約一千

防空諸部隊の地上戦闘参加準備

軍の集積運送途揚するに伴ひ且つ従来の空襲効果にも鑑み戦闘開始後は有力なる防空諸部隊は其の本来の防空任務に使用するよりは寧ろ直接地上戦闘(対戦車、対舟艇、其の他死傷的用法)に参加せしむるを有利と判断し予め戦闘開始後に於ける防空各部隊のオ一旅団諸兵団への配属並に配属後の戦闘任務を予定し之に基き其の他の地上戦闘準備を実施せしめたり斯くて地上戦闘に参加すべき防空火器は七、五種高射砲約七十門、高射機砲約百門(海軍所屬の機関砲十門を含む)

防衛召集

特設警備中隊、特設警備工兵隊の要員の外全島民臺土防衛に参加すべき精神に則り軍は昭和二十一年一乃至三月の間に於て防衛召集の人員は次の如く本防衛召集に依り沖縄民中第十七オ一滿四十五才迄の男子は殆ど全員戦闘に参加することとなつた。

- 1. 海上挺進戦隊の爲の作業要員
- 2. 各海上基地大隊の主力を戦闘部隊に改編した補充として本島四ヶ戦隊の馬合計約三千
- 3. 兵站地区隊の爲の作業要員
  - 左廣良同群島各海上基地大隊の主力を戦闘部隊に改編し沖縄本島に転用した補充として兵站地区隊長指揮下の水上勤務一中隊と一小隊を之に充当した馬に新に兵站地区隊の作業要員として約二千
- 4. 一般戦列部隊の馬前項以外の後方作業力を次々増強する馬約一万五千

男女中学生の組織

沖縄本島内男子中等学校上級生を以て鉄血義勇隊を編成し之を各戦列部隊に令属し、一部人員は昭和十九年秋より道徳兵要員として教育し、其の成績良好なり、総数約一千五百、沖縄本島内女子中等学校上級生は昭和十九年秋より衛生勤務要員として教育中にして総数約六百

I. 天号航空作戦準備

軍は前述の如く独自の立場を以て三期作戦準備を計画準備つありしが、比島に於ける捷一号作戦絶望とされる昭和二十一年上旬頃以來新構想に依する大本營の作戦計画(天号航空作戦計画)漸次明となり本作戰指導の一般方針は南西諸島台湾、中南部支那及び南部佛印等東支那海周辺地域に未攻する敵に対し陸海軍の可動全力を投入して之を兼滅せんとするに在りて南西諸島に未攻する場合を天一号作戦と呼称された

昭和十九年十一月以來の軍の作戦方針は新に策定せられたる天号作戦の方針に合致せしを以て改変の要を認めず且此の作戦計画の内容は航空作戦に關する事項が主体にして地上作戦に於ては北、中、南飛行場地区の防禦が部分的に問題となつたに過ぎない

天一号作戦を觀察するに我が陸海の航空が南西諸島に予定する中兵力は其の主力とも考へられ其の強大なるは軍の頗る意を強うるところにして而かも戦斗方式が全部張り付け將攻主義にして其の確實を期する点に於て益々然り即ち我が沖繩本島の各飛行場に於ても展開予定兵力は約三百機に近く軍は之が秘匿格納設備の成に努力し三月中旬頃に於ては全機展開可能な状態に在り

以上の如く天号作戦に於ける航空作戦計画は軍首脳部より敵の進むものありしも敵の進攻時期を三月下旬乃至四月上旬と判断しつ航空部隊の實際の展開完了時期が四月末と計画せられあるは其を失する虞れ頗る大なり、實際に於て軍の憂慮せし通り計画に基き航空部隊は三月二十六日敵の上陸準備砲爆雲の最中僅かに六機が到着せるのみにして他は沖繩本島には展開することはなく戦死せり

J. 一. 航空関係準備

軍は十月中旬の台湾沖航空戦に於て軍の努力に成れる各飛行場(主として伊江島及び沖繩)に數百機の陸海航空を展開せしめ其が出現準備を援助し優渥なる勅語を賜はりしが爾後昭和十九

一月より昭和二十年初頭に至る間比島空戦参加のため連日十數機乃至百數十機に及び漸下する陸海航空部隊の機動を援助し其の數機は三千機に達せり

比島航空作戦に鑑み我が航空の戦法が前述の如く張り付け將攻主義を採用するに至るや軍は之に即応する爲めに觀望完成せる南西諸島及飛行場の附属施設等に飛行機の秘匿、遮蔽、掩護の諸設備拡張に努力せり。又此の航空戦法に関連し主陸地帯内に於て最後迄使用し得る飛行場を保有するの要ありと判断し首里北側に秘密飛行場の建設を始めたるも作業半ばにして戦斗初終し其の目的を達し得ざり

沖繩南飛行場は昭和十九年七月一降之が設定中止を命ぜられ其の儘なりしが昭和二十年初頭より再び中央の命に依り作業を再開せり

因みに本飛行場は首里飛行場と秘密誘導路を以て連絡し相互有機一体の飛行場たらしむる計画なりき

天号作戦計画に基き航空部隊の沖繩展開が機に合せざるを看取せる軍は三月に入るや沖繩本島に於ける全飛行場を即刻徹底的に破壊するを有利なる旨意見を具申せり

軍の意見具申は直ちに認められ先ず江伊島飛行場は破壊を許可せられた

軍は三月十日頃より所在航空関係部隊を以て破壊を開始し三月末頃には機械力充足せる米軍と雖も之が補修には十日を要すべしと判断せらるゝ程度の作業であつた

後方準備

兵糧関係

比島作戦の絶望状態に入るや同方面に輸送中の兵糧を軍に交付せり其の概数次の通り

小銃	數千
輕機	約四百
重機	約四百



砲 兵 約二百  
機 械 約十

右兵器は第一線部隊及び特設部隊に交付せり、之が馬歩兵と並  
しく充実し主陣地帯一行正面輕機、重機各々約二十五、重機約十  
密度となる。

2. 彈 薬 関 係

各種火器概ね一會戦分(野戦重砲及び高射砲に在りては一會  
強)を保有し、若しその全数を第一線兵団部隊に交付保管せし  
り。

但し輕迫重砲は一门あたり僅かに三百発を保有するに過ぎず  
軍令して二百門に於る迫重砲隊が二十分間の発射彈数を有するに  
過ぎるか如きは実力等に等しと謂はざるべからず、軍は昭和十  
秋以来百發手段を盡して彈薬の充実に奔走せしも目的を達せず  
ニ勃発直前に漸く中央より代用として九二式歩兵砲彈薬十萬發の  
付を許可せられたり。

然れども時機既に遅く其の大部は輸送途中奄美大島附近に於  
て没するか若くは鹿兒島港を出帆する能はず、結局軍が機帆船に  
換へを行ふ等、凡ゆる手段を盡して入手し得たるは約一万五千  
發に過ぎず、多数の迫重砲を有しながら戦場に際し其の威力を發揮  
せしは遺憾の極みなり。

3. 糧 秣 関 係

糧秣量は各島嶼により若干の相違あるも各部隊概ね昭和二十  
月未頃迄の分を保有せり、其の集積区分は彈薬と同様殆ど其の  
全員を各兵団部隊に交付し軍としては予備糧秣を保有せず。

4. 燃 料

十萬本を要せり是等坑木は沖縄島南部地区に於ては入手し難  
く國頭山嶽地帯に取めざるべからず之が馬軍は其の採採地帯を  
兵団に区分配当し各兵団は之に基き夫々伐採班(胴囲に於て數百  
兵員を基幹とせり)を編成派遣し採木に従事せり坑木の伐採地  
帯は紫城地帯への輸送は陸上搬送力の貧弱なる爲主として海運に

るべからず之が馬軍は全島内に於て收集し得たる割舟約七十隻を  
兵団に分配し更に南方運航の機帆船及輸送船の那覇港滞留期間を  
利用(之を間隔輸送と称し船舶輸送司令部沖縄支部之に任ず)せり  
然れども昭和二十年一月以降は連日比島方面より飛來する日24  
の攻撃並に教度の上空襲に依り真珠没せらるゝもの多く且之を回避  
する爲夜間を利用せざるべからざる状況となり所望の如く輸送効率  
を發揮し得ざりき

築城の進度は坑木の入手量に依り決定すとは各部隊の声にして幸  
災坑木をなくして洞窟は掘削する能はず之を強行せば崩壊死傷続出す  
のみ坑木の入手難不足が軍の築城を遅滞せしめたる是は眞に計り  
知るべからざるものありき

道路の新設拡張

軍は捷号作業準備の爲北、中飛行場地区と南部高尾地区との間に  
軍主力の機動路として四條の道路を補修若し新設に着手し其の作業  
中に概成せんとしありしが攻撃企圖放棄は其の必要なきに至れる  
爲之を中止し爾後主陣地帯内特に首里南北に於ける砲兵機動の爲  
の道路細整備に専念せり

通 信

無 線 通 信

オ十方面軍及大本營との間には二通信系を保持す  
軍艦下各島嶼守備兵団との間には航空通信をも含め概ね一通信系  
を保持す。  
沖縄本島内に於ける無線通信は國頭支隊及び伊江島との間を除き  
同戦区概ね訓練のみに止めたり

沖 縄 本 島 内 有 線 通 信

概ね所望の如く完備せり  
伊江島と本部半島との間には着信線を敷設しあり

射 砲 掩 護 裝 置

無線送受信所は分散し且洞窟内に收容し一部のものはコンクリー

(52)

ト製とせり有線通信網中重要幹線は地下線とせり

4. 電標は各主要島嶼に設置せり

沖繩本島於ては陸軍のみにては敷ヶ所に設置し成績良好の除  
數十料、普通六、七十料の地点に於て敵の進入を探知せり

5. 局地的補助通信として犬、鳩等も相き数準備し、且之を利用

### 十五 海軍部隊との関係

1. 南西諸島には沖繩方面海軍根拠地隊司令官及オ四海上護衛  
司令官(同一指揮官兩者を兼ね)指揮下の部隊並に海軍航空隊  
の部隊配置せられあり。根拠地隊及び海上護衛隊に属するも  
は防空隊、海岸砲台守備隊、護衛艦艇部隊等ありて航空部隊  
置と相関係し奄美大島、喜界島、沖繩本島、宮古島及び南大  
に展開す陸海軍の任務及び指揮関係は皇土防衛要綱及び西部  
にオ十六方面軍)佐世保鎮守府間相互協定並にオ三十二軍沖  
面海軍根拠地隊(オ四海上護衛隊)間現地協定に拠り明確な  
めたり。

2. 沖繩本島に在る海軍部隊の兵力、配置及指揮関係の概要次  
り。

#### 兵力

總員約八千

陸戦の訓練を経たる戦闘員は二千数百名にして他は防衛  
者、工員、備人等

#### 兵器裝備

十二打以上の海岸砲台	約四十
高射砲	數十
高射機関銃	約百
重機	約百五十
輕機、重砲	數十
配置	各約二百

配置

(53)

大部を以て小嶽海軍飛行場周辺一部を以て陸軍陣地内に展開す  
指揮関係

根拠地隊司令官指揮下の部隊(海軍航空部隊を含む)の大部は  
小嶽飛行場周辺に於て戰鬥開始と共にオ二十四師団長の指揮下  
に入る

沖繩北飛行場地区及耳頭地区に在る海軍部隊は戰鬥開始と共に  
夫々將校オ一旅隊長及西頭支隊長の指揮下に入る

オ二十四師団の作戰地境外に在る一部の海岸砲台は平時より所  
在兵團長指揮下に入る

### 沖繩島民の処置

作戰上の直接的要求は勿論非戰鬥員の無益なる損害を避け且全般の  
糧食問題解決の爲に軍は昭和十九年夏以來南西諸島特に沖繩島民の疎  
開を強行せり其の概況左の如し

#### 島外疎開

軍隊軍需品輸送の空船を利用し沖繩島民は主として九州方面に又  
官古、石垣方面の島民は主として台湾に夫々疎開せしめたり戰鬥  
発近に島外疎開せる人員は前者約八万、後者約二万なり

#### 2. 沖繩本島内に於ける疎開

非戰鬥員の全員島外疎開は軍の希望するところなるも海上輸送力  
の制約並に島民の不決断に基西し疎開者の如く維持せず故に於て昭  
和十九年末皇土警備要綱の主旨をも考慮し激戦を豫期し沖繩島南半  
部の住民を比較的的安全なるべき北半部に疎開せしむるに決し概要左  
の如く処置せり

1. 六十才以上の老人並に國民学校在學以下の小兒は昭和二十年三  
月未迄に北半部に疎開を完了す

軍は北行の空車輦及空機帆船を以て之が疎開を援助す

2. 爾余の非戰鬥員は戰鬥勃發必至と判断せらるる時機に軍命令を  
以て一挙に北半部に疎開せしむ

以上の処置は輸送力の貧弱、住宅の欠乏、食糧の取得難等数多の思

(54)

條件に漏れせられし軍官民の協力に依り戦闘開始迄に(4)項に依るもの約三万人、(4)項に依るもの本略々同数に達せり

### M. 現地自治

1. 沖縄は国内有数の人口密度大なるも米の産額極めて少く農産の主体は甘藷にして年々二十数万石の米を台湾よりの移入を以てする状態で軍は軍自体の爲のみならず島民の爲にも食糧を島より集積すると共に協力現地自治に努めた。食糧の外自動車燃料、木造船、軽自動車、一部薬品等の製造を施せるも資源の食糧、工業力の幼稚等の爲成果見るべきものなほ僅かに甘藷を材料とするアルコール(自動車燃料)月産額三百に達した程度であった。

2. 海上交通長期に亘り遮断せらるる場合の非常対策としては軍民總べて甘藷に依存することとせり。全部を屠殺し軍官民の食糧とし且之が飼育に充ちしありし甘藷食糧に転用せば沖縄本島に在る軍官民の現地自治は概ね可能と断せられたり

### エ 敵情

#### 1. 空襲

昭和二十年一月以降比島を基地とする敵B24の一乃至数機を以てする計画的偵察は連日実施せられたるが初偵察のみに在りて是等の敵機は逐次海上に在る大小の船舶、陸上の自動車等に対しても徹底的に攻撃を加ふるに至り、海陸の交通に至大なる影響及ぼせり。本期間に受けたる大空襲は次の如く其の未襲数は各々機内外に達せり。然れども陸上に於ける我が損害は殆皆無なり。のみならず我が防空部隊の対空戦闘機新次熟練巧妙となり、毎敵に相当の打撃を加へたり。

昭和二十年一月三、四日

同 一月二十一、二日

(55)

昭和二十年二月 一日

### 海上の状況

敵空軍の活動激化に伴ひ敵潜水艦の跳梁又甚しく昭和二十年二月中旬以降に於ては輸送船に依る本土及台湾との交通殆ど杜絶し帆船に依り僅かに小規模の輸送を継続し得る状況と見ゆ

### 概況

状況の緊迫すると共に烽火も事件頻発し且敵潜水艦に依る沖縄向艦の潜入観望喧伝せられ各部隊及警備隊共に努力せしめ之が功を得るに至らざりき

### 状況判断

昭和十九年末乃至昭和二十年初頭に於ける判断。比島作戦の推移並に中部太平洋及南太平洋方面よりする敵兵力集中輸送の状況と一般の戦略目標に鑑み敵の沖縄進攻は必至にて其の時機は昭和二十年三月乃至五月の間と判断せり。

昭和二十年二月以降に於ける判断

比島作戦の急速なる悪化、硫黄島の戦勢、敵機動艦隊の行動並に敵の兵力集中状況等より判断して敵の沖縄進攻は三月末乃至四月上旬と予察した。

### 事件

#### 軍司令部の移転

軍司令は従来那覇、首里两市の中岡安里の雲葉試驗所(軍司令部)及女子師範(軍各部)に位置しありしが状況緊迫に伴い一月十五日前者を首里に後者を津嘉山に移転し戦闘配置に切り、津嘉山の洞窟司令部は既に撤収し首里の洞窟司令部は首里江幸中なりしも三月末撤収せり。

## 第二部

### 第一章

#### アメリカ軍の沖縄本島攻略の爲の事前作戦

##### 第一節

###### 其の一、概略

沖縄上陸のための事前作戦は、戦術的並兵站的に十分な検討で準備せられ、且つ長期に亘る苦心努力の結果成就されたものである。太平洋方面、南西太平洋方面及支那戦場に作戦中のアメリカ軍は、1944年10月より1945年4月に亘る間、日本軍の別海軍勢力を制圧するに必要激烈な戦いを敢行した。3月の最終における慶良間島攻勢間、アメリカ海軍は主目標たる沖縄に対する攻撃を実施した。又進攻諸隊の乗船搭載の期に先立ち、ルソン及島を攻撃した。

###### 其の二、敵戦力の事前制圧

(1) 沖縄に対する最初の攻撃はオ3艦隊の一部たるマーク・A・4エル海軍中將の指揮する重空母攻撃部隊(Fast Carrier Task Force)を以て、レイテ攻略の準備作戦として実施された。この攻撃部隊は、空母9、戦艦5、護衛空母8、重巡4、軽巡7、対空巡3、駆逐艦より成り、10月10日早朝沖縄沖に到着した。攻撃実行つては奇襲の成果を収めるために逆べるように、凡ゆる努力がなされた。艦隊は南西方面より沖縄方面に進行中の颶風の進路を悉く避いながら進出、なお巡洋駆逐艦より成る小艦隊を以て東方のケオロ島のマルカス島に対し大艦隊を察いつつ牽制攻撃を実施した。マリアナ基地の飛行隊は硫黄島に対し猛攻を加え、以て西面よりする敵の搜索を妨害し且つ第3艦隊前面に対する搜索を断した。

(2) 10月10日掃蕩直後、沖縄に対して艦載機を以て波状攻撃

した。オ一艦は龍谷、嘉手納、伊江島、那覇飛行場に対し爆撃、ロケット、掃射攻撃を実施し、次で攻撃を揚陸、港湾施設及これに類する目標に転じ、終日継続した。この攻撃において多数の敵機を分散配置の掩体内で撃破し、また少数は空中に於て撃破した。パンカーヒル戦斗爆撃機の1機は豆潜水艇のむやい襲撃の真中に一弾を被下した。久米、宮古、奄美大島、徳之島、南島及その他の琉球諸島に対しても搜索及攻撃を実施した。

如上の攻撃は重空母部隊を以て僅か1日間に実施した戦いとして最も猛烈なものであつた。出撃回数4,356、発射ロケット弾6ヶ、水雷21、爆弾541をに達した。那覇は炎上し繁華街の5分の4は廃墟と化した。敵機に与えた損害は撃墜23、地上或は海上撃破88に達した。敵艦船に与えた打撃としては貨物船20、小艦46、豆潜水艇4、駆逐艦1、潜水母艦1、掃海艇1、その他を撃沈した。

ミッチェル提督の報告する戦果はおそらく内輪なものであつたらう。日本側の記録によれば沈没せるもの更に駆逐艦、掃海艇各1を加え、且つ機銃弾5,000,000発及玄米300,000石を喪失したと。尚敵側ではこの日アメリカ軍はレイダー“窓”を使用し、宣伝要を撤去したと述べ、更にこの日琉球主要地区の写真撮影という実に重要な業績を挙げたことを新に指摘している。

その後は翌年に至るまで沖縄攻撃は行われなかつた。1945年1月3日、4日台湾に対する重空母の攻撃を実施した際一部の艦載機を以て琉球及先島諸島を攻撃した。当時該攻撃部隊の主任務は台湾攻撃であつて琉球に対しては戦術機の出撃距離の両限上制約を要した。1月22日ミッチェル提督令下部隊は主として空中撮影の目的を以て再度沖縄に対する攻撃を実施した。この日の天候は好適でなかつたが、所望地域の約80%を撮影し且つ地上施設、飛行機、艦船等に対する攻撃を行つた。この攻撃は先の10月の場合に比し小規模ではあつたが、日本軍に及した事は相当激烈であつた。

3月1日、この度は重空母攻撃部隊(Fast Carrier Task Force)

は、スプリュアンズ提督麾下の第5艦隊 (Fifth Fleet) の一部分を構成する第58攻襲部隊 (Task Force 58) として再び琉球に対して攻撃した。この日は彼の東京攻撃も実施した日本近海一帯に対する連日続く連日に行なう戦斗遊弋の最終日に当り、琉球列島を北からそうめんにして沖縄の他、奄美、南、徳之、沖永良部の諸島を攻撃した。巡洋艦及駆逐艦隊は九州を距る450哩の沖之大島を砲撃した。これは艦隊が日本近海に対して艦砲攻撃を加えた最初である。今次の戦果は駆逐艦1、貨物船8、その他大小計45隻余の艦船を撃沈し、撃破せる敵機41、その他飛行場施設を破壊した。敵の抵抗は微弱で我方の損害は微弱であった。

1945年2.3月中、南西太平洋方面及マリアナ基地の航空部隊は連日琉球及其の近海上空を飛翔した。陸軍及海軍の捜索機及巡洋艦は貨物船その他の船舶を攻撃して沖縄の弱体化を四圍互つ外敵との交通を遮断するに努めた。沖縄の高空を飛び、2機の重爆撃機を見るのは日常の通例となり、敵側はこれを呼んで“定期便”となし、対空警戒も発令せずすませた由。3月中潜水艦を以てする封鎖も強化した。

4. 1945年3月14日「オ58攻襲部隊」(Task Force 58) はワルシーを出航して北上した。その攻撃目標は九州、西部本州、四国で囲まれた内海(瀬戸内)に指向し、その目的は敵本土の航空及海軍基地を攻撃して琉球作戦を準備するのにあつた。この強大な攻襲部隊は大空母10、小空母6、戦艦8、巡洋艦16、駆逐艦12及その他の艦船より成り、かの有名なホーネット、ヨークタウン、エンタープライズ、ニュージューシー、ミッスリー号なども参加していた。

この攻襲部隊は3月17日九州に近接した時敵の捜索機に遭つたがこの日は攻撃を受けなかつた。18日拂曉戦斗機護衛の駆逐艦2隻を以てレーダー捜索の配置につかしめ、0545攻襲部隊は九州南端の南方100哩において先頭の戦斗機隊を密着させて九州飛行場に指向した。1時間余に及び戦斗機の進撃に次いで爆撃及魚雷機が

襲撃させ午前中九州沿岸の敵機及飛行場施設を攻撃した。敵の抵抗は弱体化に伴い翌日実施予定の内奥に対する攻撃が発令された。この日の戦果は轟撃102機、地上撃破又は損傷277機及飛行場施設に大破壊を与えた。

敵機は終日反撃して来たが大規模ではなかつた。併しその攻撃は猛烈果敢であり、単機で雲にかくれて空母に突撃したものもあつた。レーダーはたいして効果を挙げ得なかつたし、駆逐艦の目視発見もできなかった。巡航機によって敵機12を対空火器により21機命を奪ったが、ヨークタウン及エンタープライズは爆撃を受け、前者の損傷は軽微、後者は不発であつたので両艦とも航空機を継続するに差支なかつた。

3月19日ミッチェル提督はその攻撃を本州及四国の敵飛行場並に神戸、呉、広島に集中した。当時大和をはじめ日本海軍艦隊の大部は呉及広島港に在居していた。敵艦船に対する攻撃は、その前哨射撃が猛烈、正確であつたため、中程度の効果を挙げ得たにすぎなかつた。呉上空においては軍に一群だけで13機を襲つた。大和に与えた損害は軽微、捜索母艦1に相当の打撃を与えた他14隻の艦船に損傷を与えた。内海の商船や沿岸船は撃沈または撃破した。

3月19日オー一次遠征機の雷艦直後、敵機は我攻襲部隊の上空に襲撃例の如く空母に対して攻撃を集中した。フランクリン号は550lb弾2個を受け炎上沈没した。ワース号は1弾を蒙つたが消化し1時間後には活動を再開した。当時天候は敵側に有利で上空25000呎に薄雲層があつた。オ58攻襲部隊はこの日午後戦場を青陸し、空母を以て減速5節のフランクリンを掩護しつつ九州飛行場に対する攻撃を続けながら緩徐に南進した。

此日の戦果は空中戦または対空火器によつて撃墜したもの97機、地上で撃破または損傷させたもの約225機に達した。本州、九州、四国の20箇以上に及び敵飛行場施設に損害を与えた。

3月20日も亦日本の“妖怪”はオ58攻襲部隊に連日午後から別にかけて来襲した。エンタープライズは火災を起したので友軍の

破害によって沈没せしめて。この夜敵雷撃機8の来攻を見たが  
はなかつた。その翌日敵は爆撃機32と戦闘機16を以て猛烈  
来たかアメリカ戦闘機24は約60哩前方でこれを迎撃し敵機  
を撃墜した。アメリカ側の損害は2機にすぎなかつた。

オケ8攻撃部隊は22日沖繩南方において補給船団と会合し、  
食糧、操縦員及飛行機の補充に多忙を時を過ごし次で来る  
作戦を準備した。

3月18日より22日に亘る全作戦経過において敵機528  
り艦船4隻を撃破し、その他多くの格納庫、工場、倉庫、船渠  
とに損害を与えた。しかしてその成果の大なりしことは、その後  
週日を経て決行された沖繩上陸作戦に当り日本側の反響の振れ  
つたことによつても如実に看取せられるであらう。

第二節 慶良間諸島の攻畧

(1) 琉球上陸の第一歩を印したのは沖繩西方15哩の慶良間諸島で  
る。慶良間諸島を攻畧する目的は、沖繩に対する本土上陸の一  
前にこれを占領して、そこに水上機基地と攻畧軍に対する補給  
する船舶の泊地を獲得しようとするにあつた。

さらに一つの目的は本土上陸決行の前日、渡良<sup>と</sup>知海岸に対し野  
砲を以てする準備砲撃のため該海岸から11哩の高上に砲兵陣地  
獲ようとするにあつた。本作戰の任は、西方諸島攻畧隊に課せられ  
その上陸部隊には、オケ7師団を、慶伊瀬島に配置する準備砲  
隊には、オケ20野戦砲兵団を充當された。

(2) オケ7師団は前年(1944年)11月以来の作戦地レイテを  
とし、LST22、LSM14、LCI40隻を2船団となし、  
月20日目的地に向つた。その2日後輸送船及び貨物船団は捜索  
艦、駆逐艦若干の護衛の下にこれに航行した。諸隊は航行途上  
レイテ以来の洋雷訓練を継続し、作戦計画について打合せをし  
地図、航空写真、戦場附近の模型などを詳細に研究した。沖繩に向  
て風習、行政、歴史等に關する小冊子を頒布された。航海中は

3月26日、慶良間諸島附近に到着した。

慶良間諸島に対する海軍及び航空部隊の攻畧は上陸2日前に開始  
された。沖繩東方海上に泳ぐオケ8攻撃部隊の空母及び戦艦の  
護衛の下に掃海隊は3月24日目標南方海面の掃海を開始した。3  
月25日、ウィリアム・H・フランティール中將の指揮する「上陸協  
同部隊」の到着に伴い掃海はさらに強化され、同日夕には南方より  
約7哩の、西方よりは市街積大なる航路を掃海した。若干の機雷  
が発見された。25日には水中障礙排除班を以て人工障礙を濫用し  
た。しかし海岸のリーフ頂は高潮時水面下敷に、低潮時には水面  
上にあらわれていた。各島は概して海岸や上陸に不便で、島の相配  
は概して攀登及通過困難な状況である。部落附近には耕地存在し、  
航路は僅かな歩小径あるのみ、滑走道路地はない。大部隊の行動や  
補給地の設定は不可能であり、唯一の戦略的価値は、慶良間海峡及  
所島海峡の治地(長さ500乃至1,000碼44個、水深13乃至  
37尋)である。

3月26日朝オケ7師団の「大隊上陸チーム」(BTL Battalion  
landing team)4個をもつてオケ1次上陸を実施した。天気晴朗、  
視良好、海上無風であつた。海軍の誘導艦先行の下に水陸両用の  
トラクターの波状群は、LSTより登陸し中央部の四個の島々(西  
島、慶留間、外地、座間味)に向つた。巡洋艦、駆逐艦その他の小  
艦艇は5インチ砲、ロケット砲、迫撃榴弾を以て上陸海岸を掃射し  
た。空母搭載機は敵の顧慮ある地域に対して攻畧し且つ敵機及潜水  
艦の来攻に備えた。水陸両用戦車はトラクター群を海岸に誘導した。  
最先頭上陸部隊は、オケ305連隊戦闘団(RCT, Regimental  
Combat Team)のオケ3大隊上陸隊であり、0830所島島の南方  
海岸に上陸した。敵は特攻艇操縦者、朝鮮人労働者等約200名が  
迫撃砲機関銃火をもつてアメリカ軍に抵抗したが、何も無く異地に  
退走した。

次に攻略したのは慶留間島である。0825オケ305戦闘団のオ  
ケ1大隊上陸隊は、若干の粗害の他、抵抗を受くることなく、上陸し

た約20名の敵を掃蕩し、時間にして完全に占領した。この戦闘は進行中に、野戦砲兵304及オ305大隊の105mm榴弾砲の

下作業に着手した。  
外地島の占領は最も容易であった。オ306連隊オ2大隊上陸は敵の抵抗を受けることなく之を占領した。座間味島は同日09時オ305連隊のオ1大隊上陸団により軽微な抵抗を非して占領された。その攻真部隊は、海岸の状況により徒渉上陸し、アガミ部より迫撃砲火及狙撃を要した。敵の兵力は約一中隊と約300名の朝鮮人労働者なりしもの如く、北方高地へ逃走した。この日午中の戦闘進展に鑑み、尔余の島をも攻奪し得る見込がついたので、準備たるオ307連隊のオ2大隊上陸団をヤカビ島に指向し、34

これを占領した敵の抵抗は軽微であった。  
アカ島及び座間味島では攻真部隊が峻坂を奥地に向って前進するに方り、激しい抵抗を受けた。阿嘉島では約1小隊の敵に対して砲を撃射した。午後東方高地内の戦いで敵兵58名を倒した。敵洞窟や掩体内から火器で抵抗し、この日1700頃までに島の3分の2を占領したが、敵兵約300と住民400は残っていた。

座間味島においてはオ305連隊オ1大隊上陸団の先頭部隊は、この日午後敵と接触することなく高地に向って前進した。然るに夜から未明にかけて敵は小銃、ピストル、刀を掲げて海岸附近のアリガ部隊に向って襲撃した。C中隊は猛攻を受け、迫撃砲及び機関銃の協力で敵の攻真を裏返すこと9回に達し、某機関銃の如き射手を代えること数回に及んだ。この間層々格闘を交えた。かくこの大隊は敵兵100名以上を殺し、アメリカ軍は死7傷12を蒙った。

(6) 翌27日敵の抵抗を受けることなく、安室島を占領した。阿嘉及座間味島では27日午前中も戦いが継続しこれに協力するたため航空機の掃射、爆雷、ロケット攻真及迫撃砲及機関銃火を指向し、オ305連隊オ1大隊上陸団は、座間味島よりする野戦砲の掩蔽下に、27日0911凌嘉敷島に上陸し、時を経ずしてオ2大隊

はその南方地区に上陸した。凌嘉敷島は列島中の最大なるもので、幅6哩、巾約1哩である。沖縄に最も近く、慶良間諸島の東の防壁をなす。該島の海岸の大部は断崖急坂をなし、中央部の高地は高さ400呎に達して南北に連亘し西海岸の湾入部の凌嘉敷及阿波連の両部附近は砂浜で上陸地として選定された。

凌嘉敷上陸においては敵の抵抗は軽微であつたが困難は聳る地形の故にあつた。当初は予備であつたオ3大隊上陸団は島の南西部を掃蕩する任を受けて上陸し、先に上陸したオ1、オ2大隊は日没頃までに島の凌嘉敷(東海岸)に対する攻真を準備し、翌日凌嘉敷に向つて進み迫撃砲500発の準備砲撃の後これを占領し、次いで全島を掃蕩した。

慶良間諸島の攻略は、29日夕刻までに完了した。この間オ77師団は15ヶ所に分散して戦ひ、LVTによる舟艇から海岸への行動が死、DUKWによる舟艇から海岸への行動2ヶ所、LCVPによる舟艇から海岸への行動(LVT移動艇を含み)3ヶ所、LVTによる舟艇から海岸への行動5ヶ所に及んだ。かかる複雑な行動であつたのに、オ77師団の先頭部隊はさほどの混雑を惹起しなかつた。3月26日乃至31日の間オ77師団は530名の敵を殲し、200名を捕虜とした。アメリカ軍の損害は、戦死31名、負傷81名であつた。

座間味島攻略について座間味島上陸が実施された。この島は波真知島の南西11哩、那覇を距る8哩西方にある珊瑚性の4個の島である。この島の価値はここから150mm砲を以て沖縄南部の大部分を掃蕩し得ることにある。かつてのクエゼリン攻真の戦術的教訓に鑑み、オ10軍司令部はオ8区IV軍団に対してその野戦砲2ヶ大隊を以て座間味島より上陸戦士に協力すべきことを命じた。

26日オ77師団に属せられた上陸捜索大隊は同島を捜索したが、島の抵抗を受けなかつた。31日早朝オ420砲兵団を搭載せるLSM及びLSMの輸送船隊は同島に何れも浮橋を以て砲を却下し、低い地に砲兵陣地を準備しL日掃蕩における逆襲に備へ、朝、敵後方地

域新真を準備した。この砲兵陣地は沖縄の制高点から奪取せられ、島司令官は31日夜半急襲砲撃を開始しこれに次いで警備隊を以ての前進視察を排真せしことを命じた。かくて夜半を過ぐる1時間、日本側の150mm砲撃は同島に落下したが被害はなかった。数回に亘つて同様の企図が反復された。

慶良間及び慶伊瀬諸島の攻略は日本軍指揮官を驚ろかせた。日本司令部ではアメリカ軍は最初釜ヶ崎海岸に上陸を企図するであろう。これがため艦船は慶良間列島の東方海面に進入するであろうと判断した。

日本軍は慶良間列島を以て防禦拠点としてよりは寧ろ特殊攻撃隊の基地として利用しようと考え、従つて同列島の海岸及び島内にはどの防禦施設を施さなかつた。一時同島には「海上奇襲部隊」の増及び運用のため2,335名の兵員を配置されたが、1944年末から1945年初頭にかけて沖縄本島方面の兵力の必要によりその大半本島に転移せしめられ、慶良間には海上奇襲隊の艇員約300名と600名の朝鮮人労働者が配置された。これらの守備隊は特攻艇用薬の他、機銃、迫撃砲及び彈薬を備えていた。

オ77哨艇は慶良間島で特攻艇(自殺ボート)350隻以上を沈め、これを破壊した。これらは全列島に亘り分散配置せられ且つ多量に偽装隠匿されていた。この艇はベニア板製の長さ18呎巾50呎85馬力の6シリンダー・ボレー発動機を備え最高20節の航速を達し得る。各艇は264ポンドの爆薬2個を操縦席の背後に装着し、これを解き放つと艇尾から高脱する。密着文書によれば、同一船舶は同時に3艇を指向し夫々致命部に爆薬を装着する。従つて敵艦に接すれば、この人間操縦艇は「神風」機または「馬鹿」爆弾と同一考案の自殺艇ではないのである。日本特校の言によれば、爆薬を敵艦に装着後艇は高脱し得るのではあるが、艇そのものが脆弱なため生還は望み難い。

軍命令によればこれらQボートの攻撃目標は重要な軍需品資材を搭載せる敵輸送船に指向し上陸の際最大威力を集中發揮すべき

している。日本軍は予想するアメリカ軍の船舶集合地及び各地の沿岸航路など仔細に研究図示し特に慶伊瀬地区においてはその詳細な調査なものがあつた。従つて最初に慶良間列島を襲撃したこの日本側の計画を完全に裏切つたものである。ハルス将軍の意見によればこの特攻艇の処分のみをもつても十分に慶良間列島攻略の餌となつた。と。

この作戦を通じて日本軍の主なる防禦戦術方策を偵知し得西方島嶼に日本軍の警戒態勢を奪取せることにあつたのみならず、特攻艇の風の攻直を以て輸送船を粉砕せんとする企図を封殺せしめたのである。かくてアメリカ軍としては日本軍の失つた以上のものを獲得し得たわけである。アメリカ軍は更にこの列島に掩護下の右地を得、その水上機の活動、艦隊に対する燃料及び彈薬の補給並艦船修理などため小規模の基地を獲得することゝなつた。

三節 攻襲目標の敷化 (攻襲目標の事前制圧)

慶良間列島に対する攻襲実行中、ブランアイ提督麾下のオ52攻襲隊(Task Force 52)は沖縄本島攻襲のために緊急なる特別任務一掃水中障礙処理、艦船及び航空機を以てする極攻襲一を実施した。オ58攻襲隊(Task Force 58)は沖縄の東方及び北方海上においてよりする日本海上部隊に備え、一方オ52攻襲隊は西方よりするの来攻及び北方より沖縄に対する「急行便」に対し警戒する。艦隊に在する艦船は昼間は集中射撃の実行を容易ならしむるため相互に警戒配置につき、夜間は艦艇の50%は北面海面へ、20%は北東面へ展開し、前者は日本軍の海上艦艇の来攻に対抗し得る十分な戦力有り、後者は敵の所謂「急行便」に対処すべきも甚し嚴密な敵艦の来攻に際しては適時オ58攻襲隊の協力を期待し得、危急に於ては東掃海の沖縄北方水路を経て相互に合併し得る。

砲撃射撃は3月25日開始せられ当初上陸作戦協力部隊は、南西海上に砲撃を指向し、翌日掃海の進行に伴い更に海岸に近接して熾烈な砲撃なる射撃を実施した。



日本軍は渡具知海岸に沿う相當広大な海面に機雷を敷設せるもの  
 如くこの掃海作業完了までは艦砲射撃は海岸附近に指向し得ない  
 である。渡具知海岸及びその附近の掃海を完了したのは、29日  
 であつて、フランディ提督の“從來その比を見ない広大な掃海作  
 との言は実にその消息を語るものである。アメリカ軍の掃海隊は、  
 統する敵の攻撃下において掃海区75、掃海海面約3,000平方  
 度する業績を挙げた。

3月26日乃至28日の艦砲射撃は、遠距離射程で実施され目標  
 確認困難にして射撃効果十分ならざりしも、29日以後は戦艦、  
 駆逐艦、砲艦等は射程をつめ有効射撃を実行するに至り、その  
 初の集中射撃を那覇一小掃半島地区に指向した。30日には上陸  
 の諸所の断崖に対して戦艦10、巡洋艦11を以て熾烈を榴弾射  
 行つた。31日には戦艦4及び駆逐艦砲艦数は渡具知海岸にお  
 最後の水中障礙物排除作業に協力した。午前中にこの仕事を了り午  
 は砲火を海岸附近の断崖及びその背後の敵防禦陣地に指向した。前  
 至近の射程においても重要目標を標定することが困難で敵陣地の掃  
 その他之に類する目標に対しては探射しなければならなかつた。

し日前の七日間に実施した艦砲射撃は大口徑(6インチ~16  
 弾13,000発余、5インチ砲弾数千発計り、162屯を地上目標  
 向した。判明せる敵の海岸砲には破壊又は大損傷を与えた。海岸に  
 若干の大トーチカを、没岸及内方には幾多の防禦拠点を構築して  
 たかその大部には配兵はなかつた。艦砲射撃は海岸陣地を敵制又は  
 防するよう断崖や岩山に対し、特に激しく集中された。

3月31日午後フランディ提督は“準備完了”を報じた。但し  
 附近には或る若干制止未完のものもあつたが、艦砲準備砲臺向敵  
 岸砲は敵えて発砲しなかつた。

オ58攻撃隊及び護衛母艦群はし日前に沖繩方面に対して總計3  
 95回の出撃を行つた。その主要目標は同島の飛行基地及び“水  
 ンク”——後に判明する処によれば特攻艇(爆薬を装せる自爆艇)  
 これに次いで海岸砲、野砲、対空砲、浮遊機雷、通信施設、兵

などに攻撃を指向した。

オ58攻撃隊の母艦は艦砲射撃の目標を攻撃し、護衛母艦機  
 長官及び護衛列島の攻略に協力し且つ掃海隊及び水中障害排除  
 の掩護に任じた。即ち25日には渡嘉敷島及び沖繩島の飛行場施設  
 に対し爆薬、ナバルム、ロケット攻撃を実施し、26日には特攻艇、  
 潜水艦基地、飛行場、砲陣地に対し424回の攻撃を行い翌日又こ  
 を続行し敵宿營地区に対し爆薬、ナバルム、ロケット攻撃を加えた。

3月28日乃至31日に至る間航空部隊の任務はオ10軍より護衛  
 隊に課せられた任務に基づき地上作戦と密接な連撃を保持した。飛行  
 は沖繩南部に散在する砲兵陣地に対し火力を集中した。また中級北  
 の橋梁を爆破しその10ヶ所を破壊した。比島の河畔の軍事施設に  
 してはナバルム弾15発の直撃を蒙つた。敵の航空及び海軍基地に  
 する攻撃は続行された。即ち29日には母艦機は沖繩飛行場におい  
 敵機27機破壊し24機余に損害を与えた。この期間に地上攻撃を  
 向した敵機の総数は80機に達した。掃舟木艇その他の船船をた一  
 ち挙げて破壊し、本部半島北岸の運天湖の少くもの個の潜水艦荷運  
 機を破壊した。

水中障礙物排除班は航空機及び艦砲掩護の下に慶伊嶺、南部沖繩の  
 動地域、渡具知上陸海岸に対する偵察及び障礙物排除を実施した。掃  
 機隊は海岸に対し、掃射、爆薬、ロケット砲射撃を行い是れは掃  
 機隊は障礙物排除行動を掩護した。

各種艦艇は三列配置について水中障礙排除班に強大なる協力を与え  
 た。即ち40mm砲を装備するL.C.I(G)(Landing Craft, Infantry,  
 the Support.)は距岸約1,200碼に、その後方には駆逐艦の編列が  
 距岸2,700碼に配置されその40mm及び5インチ砲を以て上陸海岸  
 の内方真地約300碼に火力を指向し、更にこの駆逐艦列の後方約1,  
 000碼の線には戦艦及び巡洋艦が配置され海岸内方300-1,000  
 碼の制圧に任ずる。

水中障礙排除班は予定より1日遅れて3月29日渡具知海岸の偵察  
 を実施した。というのは若狭海岸には多数の機雷が見られたからで

ある。本作業に協定せる艦艇は戦艦3、巡洋艦3、駆逐艦6及びCI(G)艇9に達した。敵は機関銃及び迫撃砲を以て対戦し來れることを警戒せしめた。游泳偵察により主に比謝河北方の海岸に約2900個の木製掩体(砲取口は6~8m高さ4~8m)を発見した。これによってばかりは掩隊が4線に配列されていた。障碍物排除班は30日及び31日爆薬爆線発火によりその約200個を破壊した。この種の作業は陽動地域に対しても艦砲の掩護のもとに実施した。水中障害物をなす場合においても爆薬散屯を用いてリーフの破壊作業を実施した。

本作業には英海軍の参加を見たのであるが、3月26、27日英海軍オ5艦隊司令長官ローリング中將麾下の航空艦隊は先島に対して攻撃を実施した。この飛行機は345回の出動で81発の爆弾を投下し、ロケット砲約200を発射した。英海軍はアメリカ軍に比しいくらかのハンディキャップがあった。即ち夜間戦闘機を有せず各母艦の搭載機数は小敷で且つ機動間の補給実施はまだ実行の域に達していなかった。併し英海軍はよく日本機の先島基地よりする活動を制圧し以てアメリカ上陸軍に奇を呈せる忍は頗る大なるものがあつた。

オ58攻撃隊は臨時出動の待機姿勢をとり、3月28日にはその大型空母を以て堂々と示威行動を行つた。スプランス提督より日本軍艦艇が内海より南西航路に向つて出動したとの報に接したので機動部隊は直ちに北方に向つて進行したが、敵艦隊を発見するに至らなかつた。29日には他の機動部隊も捜索に参加したが、同じく敵を発見し得なかつた。併し前記二群の機動部隊から出動した飛行機は隔途九州鹿兒島湾附近の敵飛行場を爆撃し且つ各種船舶を攻撃して戦果を収めた。

アメリカ軍の対飛行場攻撃が実行されたのに拘らず、日本側の飛行機約100機は3月26日乃至31日の間に前後互り沖縄方面に出動して來た。これら飛行機の一部はアメリカ艦船に向つて自決的炸弾一掃かて出現する日本軍の海空戦の基本的戦法の前兆一を敢行した。空攻の時期は若干の例外あるも、大体早朝または月明に乗じて行われた。

当時の日本軍は種々の新式または旧式機を使用していた。敵機は近接するにぎり単機又は個別の2機編隊となり単艦攻撃を実行する。外島基地から飛來する敵機は夜間に沖縄基地に着陸した様子がみとめられた。敵の襲撃目標となりやすいものに対しては監視と巡視を厳にした。大型艦艇の編隊に向つて攻撃を敢行せるものもあつた。敵の体当たり飛行機は9隻に命中し至近攻撃を受けた。これらの攻撃による損害は大体軽微であつたが、若干の艦船は甚大なる損傷と人員の損耗を出した。戦艦ネヴァダ及び巡洋艦ビロキシー号とインディアナポリス号を含む10隻の艦船が3月26日乃至31日間に損害を蒙り、就中8隻は特攻機により、その他の2隻は機雷によるものであつた。掩護艦艇及び航空機により墜した敵機は約42機であつた。日本軍はこの期間に特攻機以外に少数の爆弾、掃射、水雷攻撃を実行したが大した戦果は収め得なかつた。

3月31日午後海軍補給艦は上陸地区に対する最後の写真撮影を行つた。此の日夜のとほりがおけると数多の軍隊輸送艇、貨物船、上陸舟艇及び軍艦は長途の航海の最後の教理を連続し翌未明には東支那海の渡具知海岸沖合の集合地に展開する筈である。

翌4月1日の天気予報は快晴である。

### 第二章

#### 3月23日～3月31日間の32軍の状況

##### 敵上陸前の状況

A I. 敵は三月二十三日早朝より機動部隊の空軍主力を以て沖縄本島を以て南西諸島の各島嶼に求襲次で翌二十四日戦艦重巡各十餘を基幹とする艦隊を以て沖縄島を包繞し艦砲射撃を開始するに先軍は「甲戦艦」(註敵の上陸東攻に対する戦備)を下命す。敵の爆撃は艦數幾近一日千發大型艦砲發射彈一日數千乃至三萬發(五軍の概算せるものにして逐日増大せり)の規模を以て実施せられ目標は飛行場、船舶、港灣次で重要なる中南部沿岸防禦施設に在り。

古今未曾有の大規模なる砲爆撃により全島噴火山の如き凄愴の光景を呈するに至りしもかおて斯くあるを期し心血を注ぎて構築する河濱築城に據る我が軍は豫言輕敵にして志氣愈々昂り斗志益々かんなり。

B II. 三月二十六日夕刻第八飛行師団の特攻隊第三十三飛行隊の先中飛行場に到着し軍参謀(第八飛行師団参謀兼任)神少佐直接指揮の下に二十七日拂曉沖縄本島西方海面の敵艦隊に対し隊長廣森中以下全隊必死心中の突進を敢行し大型艦五隻喪失、大型艦四隻も又は大破の戦果を挙げた。

次で二十八日、二十九日沖縄本島に潛伏せしめありたる特攻隊余七機を以て敵艦に対し特攻攻撃を行い爾後沖縄よりする航空戦に依るの外なきに至れり。

C III. 敵は沖縄本島に対し上陸準備砲爆撃を実施するの同三月二十日慶良間群島中の座間味、阿嘉、渡嘉敷の三島に上陸で三十一日伊弉列島中の神山島を占領せり。

慶良間群島に在りし海上挺進隊一乃至三戦隊は一部の外海上島の遠く之を陸上に邀へて戦闘し二十七日迄には軍司令部との信連絡逐次杜絶し個々同群島を巡視中なりし軍船舶団長以下及

の艦隊は沈没を碎するに至れり。

敵は敵上陸に先り慶良間群島の海上挺進部隊に対し那覇附近に敷設すべくを命じたるも、其後阿嘉の戦況に鑑み「在慶良特攻戦隊は復讐隊を編成し無難及制舟に依り阿嘉附近の敵情を報告すべき目を命じた。残存せる海上挺進部隊は爾後比較的永く敵情を報告し、又制舟に依り再三本島と連絡せり。

神山島に上陸せる敵は十糧級長射砲七、入門を展向し連日連夜豊島を以て我主陣地帯内部に對し主として交差遮断射撃を加へ我軍の行動を妨害せり。

III. 軍は三月二十七日には敵艦隊の配置、輸送船団の位置、上陸準備砲爆撃の書氣、慶良間群島及神山島の占領其の仕續船の戦術的刷新よりして敵が沖縄本島中南部西岸特に嘉手納方面に上陸すべしとの確信を有するに至れり。

然れども沖縄島南岸湊川正面に對する敵の策動も本報りにして敵従軍の一点上陸戦法に鑑み本則戰動の算大なりとは考察せるも敵の有力なる一部が上陸することなしとは断定し得ず又若し万一上陸し來る場合には直接軍の心臓部を衝かれ致命傷を受くる虞あり。

敵が主力を以て嘉手納正面一部を以て湊川正面より上陸する場合我が我が前進部隊の抵抗を排除しつつ南下し我が主陣地帯に對し本格的攻撃を開始する迄には最少限十日を要すべく万一敵の一部が其のよかに突進し湊川正面に上陸し來らんか此の期間内こそ之を各個に撃滅すべき好機なり。

依て軍は北方陸正面の防備を嚴ならしむると共に南方湊川正面に上陸する敵を先づ各個に撃滅する方針の下に概要左の如く部署せり。

1. 独立混成隊第四十旅団は湊川正面の配備を更に強化す。
  2. 第一二十四師団は視察現勢等の終平素計画するところに基づき臨時湊川正面に攻勢に転じ得る如く準備す。
  3. 軍砲兵隊は左記部隊を湊川正面に転移すると共に平素計画するところに基づき橋頭堡破推射撃を準備す
- 独立迫撃隊一大隊

(72)

同 予二大隊 兩大隊共に死は半数(二十四門)死傷し他の半数は所屬の人員を附し旧陣地を改置す。

独立臼砲隊一聯隊の一中隊

右一部兵力部署の変更は一軍敵の牽制陽動に乗せられたるが如きあるも其の兵力移動は極く一部にして北方への兵力復帰は状況に於て隨時容易に実行し得るものなり。

V. 敵の上陸準備砲爆轟同軍は豫ての方針に基き一切の敵の偵察陽動的挑戦行動に対し嚴として応戦することなく以て我が戦術上配置及企図を秘匿すると共に逆早の損害を回避せり。

敵側の放送に於て日本軍は沿岸戦に於て積極的なりとのとありしも是我が軍の右方針に因り寧ろ當然とするところなり。但し我が方細部の状況偵知を妨害する爲戦車二十七聯隊の九の砲を以て機動狙撃隊を編成し沿岸近く暴進し来る敵小艇艇に對し直を加ふる如く処置せり。